

科学の権威主義とディスコミュニケーションを解決する 科学ジャーナリズムメディアを目指して

—IoT 領域における科学コミュニケーションの挑戦—

早稲田大学 齊藤 絵理子

Towards the scientific journalism media solving scientific authoritarianism and discommunication
- Science communication challenge in the IoT field -

(Center for Research Strategy) ○SAITO, Eriko

Abstract: By evolution of IoT, I enable the collaboration by a scientist and the academic organization and accurate quick information dispatch, and the equal nature of the technology information to the whole world is enabled. In this study, I carry out an intervention study by the science communication in a field of the IoT media, but I propose scientific authoritarianism in the science journalism and an argument called the discommunication with the scientist and clarify the mechanism of this society problem and search for a method to solve by science communication.

Keywords: scientific communication , scientific authority, scientific journalism , IoT media, IoT

IoT の進化により、科学者や学術組織による協働や正確迅速な情報発信を可能とし、全世界への科学技術情報の平等性が可能になっている。本研究では、IoT メディアのフィールドで科学コミュニケーションによる介入研究を実施するが、科学ジャーナリズムにおける科学の権威主義と科学者とのディスコミュニケーションという議論を提議し、この社会課題のメカニズムを明らかにするとともに、科学コミュニケーションによって解決する方法を探索していく。

科学ジャーナリズムの問題点

科学ジャーナリズムの権威に依拠した報道が問題になっている。瀬川は、日本のマスメディアが科学コミュニティ、科学者グループといった権威に重きをおき、権威に依拠する発表報道が科学報道のメインストリームになってしまっている[4]と科学報道の課題を繰り返し述べる。

Reich は一般的にジャーナリズムの独立性とイニシアチブが少なく、厳格なジャーナリズムの努力が少ないと述べ、ジャーナリストは広報資料を消費して処理しているに過ぎない[6]と述べている。

大石はニュースの報道者全員が研究者の求める正確性は読者には通用せず、研究者と報道者にかい離のない表現がお互い求められている[1]と述べる。

小林らも大石と同様の意見を述べ、科学記事を速報性よりも正確性という観点から記事を完成する時間をかけられるが、科学者とジャーナリストのディスコミュニケーションの溝は埋まらない[2]と述べる。

すなわち科学の権威と科学者とのディスコミュニケーションは、科学ジャーナリズムにとって社会課題となっている。

プレインタビュー

本研究に関し、新聞記者やジャーナリスト、および科学者へのプレインタビューやエスノグラフィーを行った。

プレインタビューによれば、記者は一次情報である論文を読んだり、記者会見に行ったりする時間的な余裕はないという。学術機関から発信されるプレスリリースは、メールや SNS 等、IoTメディアに載せられ運ばれ、科学情報は正確に記述する必要があるため、そのまま転載(コピーアンドペースト)することも多いという。

一方、科学者は新聞記者やジャーナリストが正確性を担保してくれないという大石らの研究と同様の不満を抱いていた。

また、エスノグラフィーでは、記者はグーグルアラートでニュースアラートを設定し、学術機関から発信された論文の日本語訳は概ね読んでいたが、国際英語論文という科学の一次情報は読んでいなかった。

科学ジャーナリズムの可能性と同期性

しかし小林らは、科学ジャーナリズムの課題がある一方で、科学ジャーナリストが直ぐに取り組める IoT メディアを活用した科学ジャーナリズムの可能性[3]について述べている。

また、藤垣は科学コミュニケーション論と科学ジャーナリズム論とで同期性がある[5]と述べる。すなわち科学のコミュニケーションと科学のジャーナリズムは同様の現象や理論が存在し、同様のスキームやルールが成立していると考えられる。

科学コミュニケーションの可能性拡張

筆者は学術機関で研究アウトリーチを担当し、毎日科学情報を発信しているが、IoTの進化は、このような科学ジャーナリズムの問題解決はもちろん、科学コミュニケーションの可能性も拡張していると実感する。

IoT メディアは、科学者や科学組織による協働や正確迅速な情報発信を可能にし、全世界への科学技術情報の平等性を可能にした。オープンアクセスとオープンイノベーションにより、私たちはどこにいても科学情報を取捨できるようになった。学術機関は科学の自己発信とオムニ化とマルチメディア化、リーチ数の確保、コストパフォーマンスの確保等、様々な可能性に満ち溢れたIoTメディアの進化に励んでいこうとしている。

すなわち、IoT メディアによって、科学ジャーナリズムの権威依存と科学者とのディスコミュニケーションという社会課題の解決の一途を得られるのではないかと考える。

科学コミュニケーションの介入調査

以上を検討するために、IoT メディアのフィールドで科学コミュニケーションによる介入研究を実施する予定である。

本研究の目的として、科学ジャーナリズムにおける科学の権威主義と科学者とのディスコミュニケーションという社会課題のメカニズムを明らかにし、また学術機関による科学コミュニケーションによって解決する方法を探索していく。手段としては科学コミュニケーションの最も基礎的な手法のひとつである科学のプレスリリースを対象とし、その行動規範やアウトカムを分析していく。最後に権威に依らない科学コミュニケーションをどう創造、生成していくか、方法論の提示や未来への展望を示す計画である。

参考

- [1]大石かおり:科学技術報道における研究者と報道者のディスコミュニケーション, 早稲田大学政治経済學會 早稲田政治経済學雑誌, 373-374 卷, pp.54-71, 2009
- [2]小林宏一, 谷川建司, 西村吉雄, 若杉なおみ:科学技術ジャーナリズムはどう実践されるか, 東京電機大学出版局, pp. 2010
- [3]前掲書[2], pp.-
- [4]瀬川至朗:科学報道の真相: ジャーナリズムとマスメディア共同体, pp. 208-209, 筑摩書房, 2017
- [5]藤垣裕子, 廣野喜幸:科学コミュニケーション論 pp.はじめに v, 東京大学出版会, 2008
- [6]Reich, Zvi. "Measuring the Impact of PR on Published News in Increasingly Fragmented News Environments: A Multifaceted Approach." Journalism Studies 11 (6): 799-816(2010)